

中国の保護者の児童虐待に関する認識について  
—黒龍江省の小学生の保護者アンケートの検討を通して—

立命館大学大学院

応用人間科学研究科

対人援助学領域

人間形成・臨床教育クラスター

ZHU Xinyi

本研究の目的は、中国の保護者が児童虐待に関してどのように認識し、どのように行動しているか、またそのズレや関係性について検討することである。中国の小学校6年生の保護者240名を対象とし、アンケート調査を行った。その結果、勉強するように促すため、子どもを叩いてしまう保護者も76.5パーセントと少なくなかった。また、子どもを叩く必要がないと思っているにもかかわらず、子どもを叩いたことがあるという保護者も8.7パーセントだった。自分の行為が虐待であることを意識せずに、手を挙げてしまったという答えも見られた。これらの結果から、保護者は虐待への意識が薄いことが示された。学歴インフレという社会で、学力を向上させるため体罰をしてしまう現状があり、また伝統的な、子どもを叩いて育てる子育て文化も見られ、この二つの要因で、体罰を容認する傾向が生まれ、虐待事件も頻発していると結論づけた。